

『かわにし 川西市史第一巻』

兵庫県川西市市域は、旧摂津国のほぼ中央に位置する。北摂山地に水源を発する猪名川の清流を支えられ、地味肥沃にして早くから農耕発達し、山には木材や鉱物資源と、古来気候温暖、みどり豊かな土地柄であった。源満仲の開発にかかる多田盆地が同市域に含まれる事実は周知知られているが、都市別犯罪発生率の極めて低い安全都市（昨年度全国三位）としても、川西の名は我々の耳目に印象深い。

かかる美しい風土にめぐまれた川西の地にも、近年急速に開発の波が押し寄せつつある。大都市大阪のベッドタウンへと大きく変貌を遂げようとする折柄、「緑濃い本市の風土と、そのうえに展開されてきた歴史は、いつまでもわれわれに身近なものとして残しつづけたいという願望」（序）から、市史編纂事業が企てられ、とき恰も市制二〇周年にあたる昭和四九年、まる三ヵ

年の歳月を費して上梓されたのが本書である。市花りんどうの絵を配した装丁は詩情を誘って美しいし、巻頭の「川西市域鳥瞰図」をはじめ、ふんだんに挿入された写真・図表類は、本文理解のための良き手助けとなっている。

さて、本巻の扱う時代は先史・古代・中世だが、構成は以下の通りである。

まず「はじめに」の部分では、市の現状を概説し、山地と平野という自然地理的条件の異なった二つの地区よりなることを指摘し、併せてそれぞれの地域における歴史展開の特徴を述べるなど、総説的意味あいが付与されている。

次に「第一章 川西地方の自然環境とその変遷」では、現在の地形や地質構成、そして自然環境の推移について叙述する。

「第二章 考古学からみた川西地方」は、先石器文化の時代から古墳時代の終末まで、周辺地域の遺跡にも関説しつつ筆を進めている。弥生中期以降の複合遺跡として著名な加茂遺跡は、ここで詳しくとりあげられるほか、市域出土の二つの銅鐸、勝福寺古

墳等も論じられる。

「第三章 古文獻にみえる川西地方」では、まず、摂津国風土記や住吉大社司解などの文獻を通して四・五世紀頃の状況を探り、転じて大和朝廷の摂津進出、その支配方式を述べる。行論中、この地方居住の氏族についての考証は詳細かつ緻密であり、今後の研究に裨益するところ多し。

「第四章 律令制下の川西地方」は、概ね七世紀の後半から一〇世紀前半までを対象とし、律令国家の支配下に、当該地域の農民がどのような生活を送っていたかを、支配の変遷に応じながら描きあげている。

従って、国郡里制から郷里制への変化、摂津職の成立と停廃、条里制とその遺構、式内社、大土地私有制の展開は本章でとり扱われることになり、章末に志多羅神の入京事件を通じて富豪層の成長に触れ、次いで源満仲の登場を展望するのである。また、和名抄郷名比定は、「通説にとらわれることなく緻密に行なわれていて、興味深い。

「第五章 中世前期の川西地方」本章は、一〇世紀後半、源満仲による多田院の

創建並びに多田盆地の開発から筆を起す。即ち、満仲の時代こそ「中世のはじまり」だとする本書の立場は、すぐれて地域史的であり、市域の特色がよく生かされた時代区分と言えよう。このほか、示唆に富む見解は随所に認められるが、何といつても最大の収穫は、次章での叙述とあわせて、中

世多田荘及び多田院の全貌が、ほぼ明らかになったことであろう。とりわけ北条得宗領としての観点から詳述されている点は、このテーマに関する従来の研究に一線を画するものと考えられる。しかも我々は、ごく最近（昭和五〇年六月）、入間田宣夫氏の論文「北条氏と撰津国多田院・多田庄」（日本歴史三二五）を得た。本書と入間田論文との間には——例えば「多田院御家人」という在地領主層の地域的結合を主体として認めるか否か、多田院御家人・得宗被官・地頭代・給主・政所等の相互関係をどう認定するか等々をめぐって——見解を異にする部分がないではない。これを契機に、多田院・多田荘についての研究がより深められんことを期待したいが、そのカギとも

言うべき多田神社文書は、本市史第四卷（考古・古代・中世史A資V料編）に収められ、五〇年度中に刊行予定という。同文書は、ごく一部の機関に写真版・影写本・謄写本のかたちで架蔵されているに留まる現状だけに、一日も早い印刷を切望する次第である。

最後の「第六章 中世後期の川西地方」は、鎌倉幕府の崩壊から織田信長の登場までを扱う。南北朝・戦国期の撰津は諸勢力争奪の的となり、川西地方の政治情勢も複雑に揺れ動くが、在地領主・農民層の動きが手際よく整理されているほか、「多田院鳴動」にも触れられる。本章末尾の一節は、満願寺所蔵の仏像群をはじめとする、平安から室町時代にわたる文化財の考察に充てられているが、紙数の制約からか、多少物足りない気がせぬでもない。しかし、その感も、続刊予定の第七巻文化財篇を併読することによって、霧散する仕組みになっているのであろう。

本書の豊富にして優れた内容は、如上の至極簡単な要約では到底紹介し尽さない。

このうへは、読者諸氏が自ら手にとって本書に接しられるようお願いしたい。

拙い紹介を終えるにあたって、二・三望蜀の言を許されたい。近年、県・市・町・村史の公刊は日を遂って盛んであり、筆者自身その学恩に浴している者の一人であるが、翻って、一般市民のための歴史叙述という視点に立つとき、率直に言って一抹の寂しさを禁じえない。本書においても、勿論そのための配慮はなされている。編纂にあたってモニター制度を設けたこと、行文に平易を心がけ、特殊な学術用語を使用する場合は丁寧な解説を附したこと、更には全体にわたってルビを施し、各章のはじめに梗概を載せていることなどは、その端的な表れであろう。かかる努力に対して敬意を払うに聊も躊躇しないが、いま一工夫を望むのは、やはり独りよがりというものだろうか。また、本書第二・第三の各章は、一部重複した時期をそれぞれ考古学と文献学とから論じているが、相互の連関をもう少し丁寧な説明していただけると、私の如き門外漢には有難いことであった。

なお、続刊予定は前述の他、本文篇として近世、近・現代各一巻、史料篇として同じく各一巻であり、都合全七巻を以て完結する予定ととき。本事業遂行の順調かつ速かならんことを祈りつつ、紹介の筆を擱くこととしたい。

(A5判 本文五六一頁 目次その他四四頁  
昭和四九年八月発行 川西市役所 三、〇〇〇円)  
(杉橋隆夫・京大助手)

### 三木與吉郎編

#### 『阿波藍譜』史料篇

このほど『阿波藍譜・史料篇』上・中・下三巻が刊行された。本書は既に刊行されている「栽培製造篇」(昭和三五年)、「史話図説篇」(昭和三六年)、「精監事業篇」(昭和四六年)などととも『阿波藍譜』シリーズを構成し、主として近世の阿波藍に関する史料を収めたものである。しかし、書名こそ「阿波」を冠してあるものの、阿波以外でも多少とも藍に関係ある史料は努めて収録されており、従ってその範囲は地

域的には北海道から沖縄まで、時代的には中世末から近代に及び、件数にして三六一件に達する膨大な史料集となっている。全三巻の内訳は、上巻に中世末から近世史料、中巻に近世史料、下巻に近代史料が充てられている。各史料は原則として編年で配列されているが、一つのまとまりをもった記録類については表紙記載年月日あるいは各事象・事件の初出の年月を以って基準とされている。従って一件の中には相当長文・長年月に亘るものも少なくない。

周知のように、本書の母胎たる徳島県板野郡松茂町中喜来の三木文庫には多数の阿波藍史料が蔵せられており、それらは従来から広く研究者の便に供せられてきたところである。本書はかかる三木文庫所蔵史料のみならず、全国各地の大学・図書館や個人所蔵史料、さらには藍に関する各種の稿本・刊本・研究論文等に至るまで遍く渉猟し、その成果を集大成したものと云えよう。本書が上梓されるまでに費やされた多大の年月と労を想う時、まさに感嘆に値するものがある。一例を阿波藍の江戸市場に關す

るものについて見ておこう。本書によれば、まず享保年間の関東売場株三六名制度の成立に至る事情を国立史料館所蔵「阿波国徴古雜抄統篇」や峰須賀文書が記し、その後享和以降の江戸市場に対する種々の統制強化や天保の株仲間解散、嘉永の再興に伴う動き等を土井富雄所蔵文書や凌雲文庫所蔵文書が追っている。また同文書や三木文庫・徳島県立図書館・遠藤林太郎所蔵文書、さらに「江戸買物独案内」などにより、当該時期の仲間規定のあり方や江戸藍店の所在、販路、価格等を検証することが可能である。この他にも、江戸―阿波間の藍玉相場に關する往復書翰、三木本店と江戸店支配人との出入一件史料ならびにこの結果たる江戸店式法(いずれも三木文庫所蔵文書)なども興味深いものである。

同様にして、徳島藩内においては云うまでもなく、大坂市場における阿波藍の流通機構とその変化等を追究することもできよう。さらに、本書には尾張・美濃・三河・安芸・信濃・畿内等々における種々の藍関係史料も豊富に盛られているから、それら